ずいそう

ところ変われば……

村　上　茂　治

仕事がら道路を利用する事が多い。自分で車を運転することも多く，初めての道路を利用する事も少なくない。その時に一番役立つのは案内標識（以下「標識」という）である。したがって，どこに出掛けても標識の色や標示内容に目が移ることになる。当然，海外に出掛けるチャンスがあると，自分で車を運転しているつもりでキョロキョロ見回しているが，自分ではよいくせだと思って納得している。このためか，海外で見る標識の色彩や標示内容が新鮮に思われ，印象に残るものが少なくない。

最も印象に残ったものとして，標識に使用されている色彩をあげることができる。標識にはグリーンやブルーの系統が最も多く使用されているが，日本でも標識に採用されている色彩なのであまり違和感を感じない。しかし，ローマやフィレンツェあるいはフランクフルトで見かけた標識板のイエロー系統には新鮮さを感じた。これは比較的距離が近い地域を案内する際に使用する色彩らしいが，日本では警戒標識に使用されている系統の色彩なので，特にそう感じたのかも知れない。

また，史跡や文化遺産等の案内にはブラウン系統がよく使用されている。ローマでは市街地内に点在する史跡の案内に使われていたし，イギリスでは高速道路のオフランプ手前に，文字の大きさ等が通常の案内標識と同様に扱われ，ブルーとブラウンの標識を並べて設置されていたのが便利でわかりやすかった。

一箇所に方向別や道路の種類で何色かに分けられた標識を，何枚も集めて設置してあるのを欧米の写真等でよく見ることがある。この方法は色彩で自分が必要とする標識を識別できる便利さがあるので私は好きである。日本では「見づらい」とか「混乱する」とか言われたそうだが，欧米では当たり前なのだろう。

次に標示されている内容の違いがある。日本では国道等の路側に起終点の都市名とその都市までの距離を，距離標と一緒に「○Δまで××km」とか「□◇から××km」と1km毎に標示している路線が多い。私は100km以上離れているような都市の場合は，1km毎の短いピッチ

よりも20～30 km毎に距離を確認できるようにしておけばよいと考えている。

イタリアの高速道路で見たのは「□◇から××km」の標示に代えて，ドライバーが判断しやすいように写真のような表現となっていて（左の数字がIC番号？　右が次の都市までの距離らしい），起終点都市からの距離によってその標示間隔が異なっているようだった。起終点の都市から100 km前後の距離だと20 km前後，300 km位の距離だと50 km前後で設置されているように感じた。これ以外は次のICまでの距離が標示されていたが，ドライバーにとってはこの方が判りやすいと思う。

メルボルンの市街地ではチョット変わった標識を見つけた。日本では二輪車等に使用している補助板と似ており，ヘアピンカーブに似た形の太めの矢印が標示されている。自動車が右折する際には一端左に出て信号が変わるまで待機し，次の信号で右折するように指示した標識である。右折車両が多いと無理だと思われるが，事情の分かった車が多いせいか混乱していない様子だった。

フランクフルト市では市街地をいくつかのゾーンに分けて，駐車情報を提供するシステムになっているようだ。駐車場の案内は路側に設置された写真のような標示板が利用されている。標示されている数字は，ゾーン単位での駐車可能台数を示しているらしく，10分間隔位で電光表示盤の数字が変化していた。我が国でも類似のものはあるが，このようにリアルタイムに近い数字を標示した例はあまり見かけない。

この他オランダでの高速道路のオフランプが一般道路に接続する箇所の車線数を表す標識，アフリカの野性動物の保護標識等があるが，まさに道路標識は「ところ変われば…」である。

――むらかみ　しげじ　北川ヒューテック株式会社北陸支店副支店長――